

【編集】阪神・淡路大震災関西学院報告書編集委員会

激震

阪神・淡路大震災
関西学院
報告書

そのとき大学人は

【発行】学校法人関西学院
【発売】日本経済評論社





目次 CONTENTS 激震日そのとき大学人は 阪神・淡路大震災 関西学院報告書

将来に生かしたい貴重な体験 宮田満雄 関西学院院长…… 4

阪神・淡路大震災を経験して 武田 建 関西学院理事長…… 6

I 震災の概要・学院の被害

阪神・淡路大震災の概要……………	12
学院の被害……………	15
教職員・理事・学生……………	16
同窓関係……………	17
阪神・淡路大震災被害復旧費内訳表……………	18
阪神・淡路大震災関連収支報告書……………	22

II 学院・大学の対応

学院	教職員の安否確認……………	27
	災害対策本部の設置……………	27
	大阪連絡所の開設……………	29
	広告・広報活動……………	30
	義援金の状況……………	35
	阪神地区被災私立大学・短期大学連絡会……………	36
	追悼礼拝の開催……………	40
	日本基督教団関係……………	40
大学	学生・教職員の安否確認……………	42
	大学の意思決定……………	46
	休講措置……………	49
	定期試験に関する措置……………	50
	入学試験に関する措置……………	53
	特別入試に関する措置……………	55
	学生に対する経済援助……………	57
	留学生への経済支援……………	59
	学生に対する住居確保……………	61

学生会館の開放……………	64
入学式・授業開始の順延・ 授業時間帯の変更……………	68
卒業認定……………	69
ボランティア講座の開設……………	70
オープンセミナーの開催……………	71
阪神・淡路大震災の総合的研究プロジェクト……………	72
3.26 Sunday Afternoon Jazz Session Stompin' at KWANSEI GAKUIN……………	74
阪神大震災復興特別企画 レッツ・ゴー・スタジアムの開催……………	76
近隣住民・地域への対応……………	77
追悼文集の発刊……………	78

III 各部署の対応

秘書室……………	83
総務部総務課……………	85
総務部人事課……………	86
総務部情報システム課……………	89
総務部校友課……………	91
財務部会計課……………	93
財務部管財課……………	95
施設部施設課……………	96
広報室……………	98
総合政策学部開設準備事務局……………	99
宗教センター……………	101
キリスト教主義教育研究室……………	103
千刈セミナーハウス……………	104
千刈キャンプ……………	105
学院史資料室……………	108
保健館……………	109

総合体育館	109
学長室(大学事務課、大学院・研究課)	111
教務部教務課	114
教務部教職課程室	116
学生部学生課(学生会館)	117
学生部厚生課	120
入試部入試課	122
国際交流部国際交流課	123
就職部就職課	125
大学図書館(運営課、整理課、閲覧課、雑誌資料課)	127
産業研究所	130
総合教育研究室	131
情報処理研究センター	132
言語教育センター	132
神学部	134
文学部	135
社会学部	137
法学部	139
経済学部	140
商学部	142
理学部	144
関西学院同窓会	147
関西学院大学生活協同組合	148

IV 高等部・中学部の対応

高等部	162
中学部	170

V ボランティア活動

関西学院救援ボランティア委員会の活動	183
--------------------	-----

発足の経緯	183
活動内容	184
救援ボランティア委員会の解散	199
関西学院ヒューマンサービスセンター の発足とその活動	200
むすび	202
関連資料	204

VI 危機管理

災害対策本部規程	220
通信手段の確保	221
講演 大学における危機管理について	224
座談会 危機管理を考える	232

VII 資料

資料1. 全学連絡会・災害対策本部会議の記録	241
資料2. 大学から全学生・保証人に郵送した通知	254
資料3. 報道機関に配布した広報資料	256
資料4. 1月31日に再開された週刊広報紙	257
資料5. 新聞広告	258
資料6. 震災関連の新聞記事	260
資料7. 大学教員組合のアンケート	266
資料8. 高中教員組合のアンケート	268
資料9. 職員組合のアンケート	270
阪神・淡路大震災関連日誌	278

あとがき	280
------	-----

挿絵：伊藤久代(国画会会友)

将来に生かしたい貴重な体験

宮田 満雄（関西学院院長）

1995年の新年を迎え、多くの人々が思いも新たに連休明けの通勤通学に向かおうとしていた1月17日未明、誰がそのような未曾有の大地震を予想し得たでしょうか。兵庫県南部地震は、阪神地区に壊滅的な打撃を与え、6千人を超す犠牲者を出しました。兵庫県西宮市にある関西学院でも、学生15人、専任教員1人、理事1人と元教職員、嘱託職員、アルバイト職員らを合わせて23人が亡くなり、同窓生を含めると60人以上の尊い命が失われました。改めて、犠牲者の方々の御霊の平安をお祈りいたします。

地震発生後1年が過ぎようとしている今、あの時のことを思い返すとつい昨日の出来事のように思え心が休まりません。電気、水道、ガス、電話が瞬時にして止まり、夜も未だ明けやらぬ冬の暗がりの中で、起こった出来事をはっきり理解する事もできないまま東の空が白むのを待つしかなかったあの時の虚脱した気持ちは表現しようもありません。後に判明したことでありますが、実はその頃すでに関西学院は学生や教職員、その他多くの関係者を失っていたのです。我が家の周囲は70パーセントの家屋が倒壊したにもかかわらず不気味な静寂に包まれていました。地震発生当日夜のあの月明かり。月はあくまでも皓皓と輝いて震災の惨状を照らし出していました。

横倒しになった阪神高速道路の姿を目の当たりにした時の衝撃は今思い出してもぞっとします。このような自然の猛威がこの地域を襲ってくるとは誰一人思ってもみなかったと思います。台風ならばいざ知らず地震については全くと言って良い程無防備でした。私達は優しい自然を信じ切っていました。風光明媚なこの地域に住む者としては当然のことだと思えます。しかし今回私達は、自然は人間を優しく包んでくれるばかりではなく、時としては想像を絶する激しい破壊力をもって人間に襲いかかってくることを思い知らされました。この自然の猛威の前に人間は何と弱く脆い者なのでしょう。私達が営々として築いてきたものが、一瞬にして崩れ去ってしまうのを目の当たりにして啞然とするほかはありません。

関西学院大学では4月に新しい学部、総合政策学部が発足しました。この学部のテーマは、「自然と人間の共生」、「人間と人間との共生」ですが皮肉なことに今回の震災で私達はこのテーマの持つ意味の重さをいやがうえにも痛感させられることになりました。

私達は今回の震災を通して人々の善意に励まされる体験をしました。また、若者を含め多くの人々が他者を思いやる行動を起こし、ある意味で人間の強さ、頼もしさを再認識することができました。しかし人間が真に共感をもって生きることがいかに難しいかということも同時に痛感させられまし

た。

関西学院におきましても地震発生直後より様々な事が起こりました。多くの学生達がこの未曾有の震災の中で、「何かしなければ」という思いに駆り立てられ、その気持ちに忠実に反応して被災者の救援のために活躍したことは嬉しいことでした。私共もこの学生の動きに大いに励まされたことでした。また、多くの同窓生が母校の安否を問うて下さり義援金等を送って下さったことも感謝すべきことでした。激しく環境が破壊されたわけですから人間の心もともすれば無秩序に走りがちな状況の中で、本学がある秩序を保つことができたことはこれまた感謝すべきことでした。このことについては理事長はじめ地震発生直後学校に駆けつけた多くの教職員の努力に負うところが大きいと思います。危機管理という言葉が地震以来様々な所で語られるようになりました。事実関西学院において私達はこのような災害に対処する組織的な仕組みを持ち合わせてはいませんでした。今振り返ってみて、よくここまで切り抜けて来ることができたというのが実感です。

私達は、今回の教訓を生かし、同様の大災害を想定した危機管理を確立しなければなりません。そのための基礎資料として、1月17日から4月24日に授業が再開されるまでの私達の体験を記録した『阪神・淡路大震災 関西学院報告書』を作成しました。本書は、震災の全体像、学院の被害状況、学院・大学・高等部・中学部の対応や臨時措置、学院全部課からの記録と提言、生協活動やボランティア活動の記録、危機管理への提言などをまとめ、補足資料を付け加えました。震災を機に全国の大学で震災対策への意識が高まっており、被災地の大学として報告書を公表することは社会的使命であると考えております。この成果が広く他大学やその他の教育機関におきまして資料としてご参考になれば幸いです。

今回の震災は実に多くの人々の命を無惨にも奪ったばかりではなく、さらに多くの人々の人生そのものを変えてしまいました。また、老若男女を問わずこれまでの人生観や自らの生き方にも大きなインパクトを与えました。私自身は、「今宵汝の命取らるべし」という聖書の言葉が妙に現実味を帯びて迫ってきたことに深い感慨をおぼえています。



阪神・淡路大震災を経験して

武田 建（関西学院理事長）

1月17日に経験したことは一生忘れないでしょう。突然襲ってきた大地震に対し、自分のベッドにしがみつきながら「阪神間には大地震はないはずだ」と自らに聞かせている間に、大きな余震が襲ってきました。しかし、人間いや私は極めて自己中心的な性格の持ち主ですから、自分の身体の上にタンスやテレビが落ちてこなかったので、わが家のまわりが大変なことになっていることに気がつきませんでした。友人が外から呼ぶ声で2階のカーテンを開けて驚きました。近所の家の瓦は飛び、全壊半壊の家がいっぱいです。1階に降りるとわが家はガラスの海でした。途端に学校のことを心配になり、ダウンに綿パンという姿ですぐに自転車に飛び乗り学校へと急ぎました。

途中でさらに全壊の家を目にし、埋まった人を助ける人たちを見ると、学校に近づくにつれて私の不安は高まりました。自転車をこぎながら少しも前へ進まない感じでした。校門に立ち正面に大学のシンボルである図書館の時計台が無事立っていることを確認出来たときには、お恥しいことですがその場にへなへたと座りこんで、涙を止めることが出来ませんでした。

教職員のなかで自分の家が全壊半壊になった人が約15%にもおよびました。また学校へこうにも電車もバスも走っていませんし、道路は封鎖され自動車は通れませんでした。地震の直後から出勤できた人は約600人の教職員のうち僅か80人程でしたが、その数は日に日に増えてきました。長時間歩いたり、自転車に乗ったり、電車を乗り継ぎ、30分以上歩いて学校へ出勤してくれました。早速、全員が集まり各部署の被害と教職員学生の安否についての調査をおこないました。特に私が心配だったのは外国から来ている教員と留学生の安否でした。はるばる我々の大学に来て、地震の犠牲になったら大変だという素朴な思いでした。私自身が学内の外国人住宅を廻って安否をチェックしました。

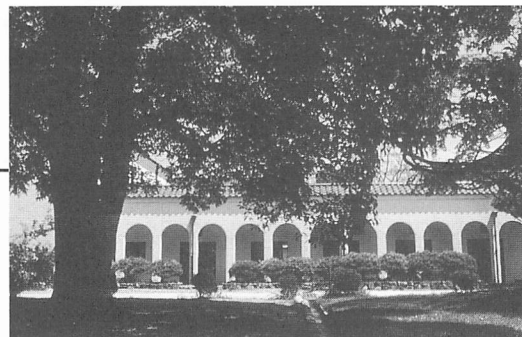
震災の日の朝一番に、各部局の代表者による「災害対策本部会議」（当初は「全学連絡会」と呼称）はその後2月1日の入学試験が始まるまで、はじめのうちは午前午後の2回、やがて日に1回開かれました。平常時ならば教授会から全学の大学評議会を通じて上がってくる決定事項も、緊急時には大学の執行部あるいは理事会（法人組織）と大学・高中がはいっている対策本部で決定してしまう必要がありました。

こうした緊急時には、正しい情報の入手と伝達が極めて大切だと痛感いたしました。教職員はもとより在學生と受験生をはじめ学校に関係ある方々には、なんとかして正しい情報を素早く流さなければなりません。ところがはじめのうち電話は全く通じませんでした。関西学院には携帯電話が

用意されていなかったことは、誠にうかつでした。そこで、多くの情報をテレビ、ラジオ、新聞で流しました。いずれも大きな費用がかかることでしたが、情報の不足は不安とデマを生み出します。電話が通じるようになって大勢の受験生や学生がいっぺんに電話を掛けてくるのでとても対応出来ませんでした。問い合わせに対する電話の対応は大阪のホテルの部屋を借りておこないました。

大学の廻りには学生の下宿が沢山あり、その多くが倒壊しました。そこでは14人の学生諸君の尊い命が失われました。大学の寮は無事でしたが、大学に登録してある下宿あるいはそれ以外の下宿に被害がひどく、学生部の職員は一軒一軒見回り、時には救出活動に従事しました。毎日送られてくる訃報を聞くことは実に悲しく辛いことでした。関西学院の教職員学生同窓は合計60数名が亡くなり、3月18日に追悼礼拝をおこないました。

学校の周辺で倒壊したのは下宿だけではありません。多くの一般の家屋が失われ被災者が続出しました。被災学生のために開放した学生会館へすぐに地域の人たちにも入って戴きました。ただ、責任者としての私の心配は、市の命令によらず私学が勝手に開放した避難所には行政当局からは食べ物も飲み水もこないということでした。このとき三田市にある千刈キャンプから、おにぎりとお茶が大量にとどきました。それを周囲の避難所に配ったことと、学生会館に避難した人のために、地下のプールから一晩中バケツで水を1階のトイレまで運んでくれた応援団や体育会の学生諸君の働きが、学内で起こった最初のボランティア活動でした。その頃、多くの学生が自発的に交通整理をしたり、病院に駆けつけて手伝ったり、避難所の連絡や警備に当たってくれていました。われわれの学校だけで2500人の大学生と高校生がボランティアとして活動してくれました。肉体的な働きをする者もいれば、避難所生活をしている人たちを尋ねて話を聞いたり、子ども会を開いたり、親子で千刈キャンプの風呂にはいりに行くツアーを計画したり、その活動は多岐に渡りました。こうした活動は必ずしも学校当局が計画を立てたものではなく、災害対策本部会議では報告はされますが、それぞれのグループが計画して自発的におこなっているものが少なくありません。多くの自主的な活動が併行しておこなわれると、時には摩擦が生じます。こうした問題の多くは人間関係に属



するようなことで、それを解決することも私たちに課せられた大切な役目であったと思います。

関西学院は関西の私学のなかでも最も早い時期に入学試験をおこないます。1月17日に地震が起こり、2月1日には入学試験を計画通りおこなうことを大学は決定いたしました。それを可能にするのが法人部局に課せられた使命です。幸い電気は数日で供給されました。しかし、水道とガスはなかなか来ません。今の時代に水無しで公共の活動をすることは不可能です。幸い関西学院には大きな井戸が2つあり、それでほとんどの日常生活用水をまかなっておりました。ただ、大きい方の井戸の浄化装置が破壊されてしまいました。試験の当日まで、施設部は他の復旧工事と並行して井戸水の確保が最も緊急の仕事でした。もちろん、試験に使う教室棟の復旧もしなくてはなりません。地震の被害は当初見えなかった部分もありますし、余震の度に新たな被害が生じました。幸いなことに関西学院では新大学図書館を建築中で、建築会社の人たちが校内にある資材を使って懸命に復旧に当たって下さいました。入学試験当日はわれわれの大学に通うための阪急電車はまだ最寄りの駅までは来ていませんでした。神戸からの電車は不通のままでした。しかし、大勢の受験生が瓦礫の山のなかを30分ほど歩いてキャンパスまでやってきてくれました。その姿を見て実に感激しました。「欠席者は例年並み」という報告を聞いたときに、正直のところ「ほっと」いたしました。

入学試験が始まり、私の心のなかに少し余裕が出来たのでしょうか、阪神地区の他の私立大学の被害状況が心配になり始めました。甲南大学が極めて大きな被害を受けておられることはテレビや新聞で知っておりましたし、災害後数日して少し様子を拝見しに参っておりましたが、他の大学については大変な被害だということを聞いているだけで、連絡も取らずお尋ねもしないままで、自分の学校のことにのみ気をとられていました。被災私立大学が情報を交換し、助け合わなくては、激甚災害法の対象にもならないのではないかという心配もありました。そこで、まず阪神間の私立大学のなかでも最も経験豊かな武庫川女子大学の日下晃理事長・学長に連絡をとってご相談し、両校が一緒になって29法人40私立大学・短期大学に被害状況についてのアンケートを送り、災害の1カ月後の2月17日に武庫川女子大学で集まりました。それが連絡会の1回目でした。それまでに全私学連合ではわれわれ被災大学のことを考え、激甚災害法では国立大学は当然100%援助され、公立大学は3分の2（実際には地方自治体からの援助があるので70-90%）であるのに対し、私学は2分の1補助になっているのをせめて公立並みの3分の2にして欲しいという要望書を文部省に出して下さっておりました。したがって、これを骨子に、私たち被災私立大学・短期大学の被害状況をつ

けた要望書を作り、2月20日に文部省の佐々木私学部長と樋口助成課長のところへお持ちし、お願いいたしました。このことをNHKが7時と9時のニュースで全国に流してくれました。その後、日下先生は何人もの国会議員に接触され、私も個人的に文部大臣に陳情する機会がありました。最も感謝しておりますのは、私立大学連盟の鳥居会長が与党である自民党の幹部の方々のところを私をともなって訪問し、陳情する機会を作るばかりではなく、私たちの知らないところでも極めて積極的に動いて下さいました。この結果、文部省のみならず大蔵省に理解を求めることが出来たと思っております。また野党の議員団とくに文教関係にご経験の豊富な方々に陳情する機会もありました。こうした働き成果でしょうか、2分の1の線を破ることは他の省との横並びをしなくてはならない立場もあり困難でしたが、第2次補正予算のなかで、さまざまな名目で実質3分の2の援助を戴けることになりました。

こうした目的のためには、関係者は絶えず電話とファックスで連絡をとり、陳情にお邪魔した方々にはお礼状という形で、陳情した内容を常にフォローアップし、また地元選出の議員には党派を越えて情報を流し援助を依頼し、またどんな反応と結果があったかを各被災私立大学へフィードバックすることの必要性を感じました。また、陳情の前に主だった被災大学の惨状を自分の目で確かめておいたことは、私にとって非常に参考になったと思います。これによりどれだけ被災大学が苦しんでいるかを実感として訴えることが出来たように思います。

もう1つの課題は、文部省に平成7年度の第1次補正予算は7年度中には消化しきれないが、それは決して十分かつ全ての復旧がおこなわれたことを意味しないということを理解して戴くことでした。例えば、甲南大学は5つの校舎や本部棟が倒壊いたしました。入学試験を遅らせ、グラウンドいっぱい建てた仮設校舎や他の大学の校舎を借りて入試をおこない、仮設校舎では今年度の授業をしておられます。ということは来年度も仮設校舎で授業をおこない、今年度の終わりから本格的な校舎の建築を始め、来年度中に完成するというご計画です。大手前女子大学の場合には、もう少し新校舎の完成が遅れるかもしれません。いずれにせよ、大きな支払いは7年度ではなく8年度と9年度になるわけです。このことを単年度予算で動いている政府の方々にご理解戴くことは難し

阪急電鉄甲東園駅前



いことでしたが、幸い文部省当局の担当者には大変暖かいご理解とご配慮をして戴けたことに感謝いたしております。

東京から大阪までは飛行機ならば1時間です。しかし、全私学連合がいち早く文部省に要求を下したことや、政府とくに文部省あるいは与党がどんな考えを持ち、どんな動きをしようとしているかは、はじめのうち在京の機関には分かっているが地方の我々まではなかなか伝わってまいりませんでした。こうした中央の動きがすぐに伝われば、われわれ被災私立大学ももっと早く適切な対応が出来た部分が少なくなかったのではなかろうかと思えます。情報化時代と申しますが、われわれ大学が如何にして情報を素早くキャッチし、それに対応して動くことが大切かをこの度の災害を通して思いしらされました。

被災私立大学として大きな被害を体験し、連絡を取り合い、支え合ってきていますが、それが復旧に対する援助にとどまらず、将来は大学間の今後の研究や教育上の相互協力や交流に発展してゆくことを心から願っています。

受験生の登校風景

